

令和4年度 第2回 東海村スポーツ推進計画推進委員会会議録

1	開催日時	令和5年2月15日(水) 18時30分から20時30分まで
2	場所	東海村歴史と未来の交流館 活動室2
3	出席者 (敬称略)	<委員> 塚原美光, 杉山章子, 鈴木範英, 吉沼玲子, 平間克司, 石丸美代子, 小泉親彦, 竹下浩一, 松坂晃, 久保田泰世 <事務局> 物井聡(生涯学習課課長補佐), 川崎彰利(生涯学習課主任), 生方育志, 坪井紗音(東海村文化・スポーツ振興財団スポーツ振興係)
4	欠席者 (敬称略)	黒羽根史朗, 田畑由紀子, 小川満, 橋本礼子, 植田裕美
5	公開又は 非公開の別	公開
6	非公開の理由	—
7	協議・説明事項	(1) 第1期スポーツ推進計画の進捗状況について (2) 第1期スポーツ推進計画の評価及び総括について (3) 第2期スポーツ推進計画の策定方針について
8	配布資料	【資料1】令和4年度東海村スポーツ推進計画 進捗管理シート 【資料2】第1期東海村スポーツ推進計画の評価及び総括(案) 【資料3-1】第1期東海村スポーツ推進計画(総括シート取りまとめ) 【資料3-2】第3期スポーツ基本計画(概要版) 【資料3-3】第2期東海村スポーツ推進計画策定方針(案)
9	発言内容	■あいさつ：塚原委員長 第1期計画策定から5年が経過し、総括の時期にきた。事前アンケートでは委員の皆さんからとても良い御意見をいただいているので、第1期計画の総括に反映し、第2期計画の策定に着手していきたい。 ■議事進行：塚原委員長 (1) 第1期スポーツ推進計画の進捗状況について

	事務局) 配付資料の説明…【資料1】 委員) スポーツ推進計画の策定により、具体的な事業や取り組みが進められたと感じている。 委員) スポーツ団体ごとの取り組みは以前から行われてきたが、行政と各スポーツ団体や住民ボランティアが連携することができた。 委員) 未就学児を対象とした「ジュニア運動遊び教室」が好評だった理由について、事務局ではどのように考えているか。 事務局) 未就学児を対象とした事業がそもそも少なかったということや、運動・スポーツに対する保護者の関心が高く、小学校に上がって「苦手」「嫌い」という意識を持つ前に運動・スポーツに親しませたいと考えているものと受け止めている。 委員) 保護者のニーズを上手く汲み取った取り組みであり、良い展開が生み出せるのではないかと感じている。 委員) 子どもが「ジュニア運動遊び教室」に参加している。対象は年少・年中・年長の3学年で、それぞれ異なるプログラムが用意されている。教室は全6回の連続講座で、毎回違うプログラムが設定されているので、子どもにとってはとても良い経験になっていると思う。運動能力やコミュニケーションの取り方は年少・年中・年長で全く異なる様子が見受けられた。 委員) 未就学児へのアプローチは良い取り組みだが、小学校高学年等運動への苦手意識を持った層へのアプローチがなくなってしまうのは残念に思う。小さい頃は自分を客観的に評価できないので、みんな運動が大好きだが、小学校高学年になると体育の授業や遊びの中で周囲と比較するようになり、得意・不得意を認識する。そこで「不得意」と認識した子をどうサポートするかが大切。そこで「嫌い」になってストップしてしまうと、「大人になってもキャッチボールができない」ということが起きてしまう。小学校高学年から大人まで、「不得意」「無関心」層をサポートできる取り組みは重要だと考える。「不得意」を「嫌い」にしないで、「不得意なりに続ける」選択肢を残してあげたい。
--	---

	委員) 具体的な方策は、というと難しいが、子どもが小さい頃から様々なプログラムを体験させることや、「スポーツ」よりも「遊び」に近い感覚で運動を楽しんでもらうことが大切だと思う。 委員) 「イモゾーリレー」を小中学校の運動会や体育祭で実施するなど、色々なところで上手くPRして村の名物のように育てていけるとよいのではないかな。 委員) 親は子の自主性を尊重させる傾向にあるが、最近は何でも子どもに判断させ、子どもが「やらない」といったら「やらない」まま終わってしまうケースを多く目にする。必要なことは親が上手く導くなど、親の判断・指導力も大切である。 委員) 従来は生徒の7～8割が運動部に所属していた。つまり、運動能力が平均値を下回る子も運動部で活動していた。しかし、部活動が地域クラブ化するとスポーツとの関係性が薄くなるため、平均値を下回る子が運動から離れてしまうのではないかと心配している。不得意だけどスポーツが「やりたい」「好き」な子が参加しやすい地域移行を目指していきたい。そのための声掛けなどは指導者の重要な役割の一つである。 委員) サッカーが人気種目になったのは、ピラミッド型で下層までフォローできる仕組みが構築されているからだと考えられている。 委員) 部活動の地域移行は、地域がどのように関わればいいのかという構図を分かりやすく示せるとよい。また、受け皿となる組織をどのように作っていくのが重要。 委員) 村内では主にスポーツ協会、スポーツ少年団、SCスマイルTOKAIの3団体が活動しているが、3者が連携して受け皿となっていくのもよいと思っている。 委員) 昨年12月に部活動の地域移行について、スポーツ協会、スポーツ少年団、SCスマイルTOKAI等の意見交換の場があり、多くの意見が出て関係者の関心の高さを感じた。 委員) 部活動の地域移行については、役場が担えない部分も出てくると思うので、地域（ボランティア）の関わりが重要にな
--	---

	ると感じている。 委員) 部活動の運営は高校も同様の流れで、活動がままならなくなってきた。OBOGが練習会を開催し、生徒が参加しているという話も聞く。 委員) スポーツフェスタでテーピング講座が好評だったのは思い当たる。「テーピングは重要」という認識はあっても、指導者が具体的な方法が分からずに自己流で行っている場合が多い。スポーツの「きっかけづくり」と併せて、テーピングに限らず、実践的な取り組みも進めていきたい。一気にプログラムを充実させることは難しいと思われるが、スポーツ実施者のニーズを捉えて、目的のあるものになっていけばよいと思う。体面的な計画ではなく、地に足の着いた計画を策定していきたい。 委員) 第1期計画において、スポーツフェスタの開催が最も大きな成果だと感じている。 委員) 以前、スポーツ少年団本部で実施していた指導者の育成は現在も継続して行われているのか。育った指導者がスポーツ少年団に戻ってきて活躍してくれるなど、人材が次の世代につながる流れができるとよい。また、指導者同士の交流も効果的だと思う。 委員) 参加者は少ないが、現在も行われている。 委員) 村の取り組みはイベントが充実しているが、人材(リーダー・指導者)育成等、組織づくりにも取り組めると良い。 (2) 第1期スポーツ推進計画の評価及び総括について 事務局) 配付資料の説明…【資料2】 ※委員からの意見は特になし。 (3) 第2期スポーツ推進計画の策定方針について 事務局) 配付資料の説明…【資料3-1, 3-2, 3-3】 委員) 第1期計画策定の際に視察に行った新潟県十日町のように、学校の体育館をまち全体で活用する仕組みが導入できるとよい。他市町村等の良い取り組み事例は積極的に収集・活用し
--	---

	ていきたい。 委員) スポーツに対する意識の変化は重要だが、施設の整備(ハード事業)は目に見えるので、スポーツ推進の成果として分かりやすい。また、「やろう」と思った時に「やれる」環境があるかどうかは重要。駐車場もスポーツ施設の一部として考えて整備していく必要がある。 委員) 他市町村で、指定管理者に建設業等まちの事業所が入っている事例を聞いたことがある。予算獲得や契約事務等の手続を経ず、効率的に施設の維持管理を行っているとのことであった。 委員) 車が使えない人でも集まれる施設として、コミセンを活用してスポーツに親しめる環境を提供できるとよい。 委員) スポーツに「関わる人」「支える人」をいかに増せるか。人づくりが組織を作る上で重要である。「頼まれればやる人」はいるが、自主的な参加は難しい。 委員) 広報とうかいで「スポーツ推進委員の公募」の記事を見た。自主的に参加してくれる人材は貴重である。是非、活用していただきたい。その他のボランティアの方もスポーツ推進に関わっていただく機会を作ってはどうか。 委員) 長野県は高齢者の就業率が日本一で、健康長寿も日本一となっており、秘訣は「積極的な社会参加」と言われている。「健康」と「スポーツ」を絡めた情報発信も「スポーツのすすめ」に効果的ではないか。 委員) 学校は卒業すると行かなくなるが、部活動の地域移行は地域の後継者育成のベースとして期待できる。上手くサイクルが回る仕組み・方策を構築していけるとよい。 委員) スポーツを通じて村民が活躍できるようになってほしい。 委員) 子どもへの施策は打ち出しやすいが、子どもも10年後には大人になる。働き始めると忙しくてスポーツから離れる。40～50代になると健康課題もあって再開する人が増える。このように階層によって必要な支援は異なるので、ターゲットを設定してプログラムを提供する等、運動プログラムの提供指針を明
--	--

	確化することが効果的ではないか。 委 員) 民間の24時間運営ジムは深夜早朝でも利用者がいる。その時間に利用したい人と、その時間にしか利用できない人がいるということだと思う。これまで、大人向けに講座を企画してもなかなか参加してもらえないということもあった。大人向けには、自分のペースで運動できる環境の提供が効果的かもしれない。 委 員) ウォーキング等の軽運動は好きで、健康のためにも行っている人は多いと思うが、軽運動は「スポーツではない」と思っている人も多い。 委 員) 狭義のスポーツ（競技スポーツ）と広義のスポーツ（身体的活動＝カロリーを消費するもの全般）がある。定義を明確に示せば、運動・スポーツを身近に感じってくれる人は多いのではないか。週一回の運動実施率も大幅な向上が見込める。 委 員) 家族が会社の取り組みで、万歩計のスマホアプリを活用したウォーキングを継続したことで景品をいただいた。景品が「始める」「継続する」モチベーションになっていたようだ。 委 員) 健康経営という考え方は企業でも一般化されてきている。 委 員) 健康増進事業において、月一でウォーキングを行っているが、景品の有無で参加者数が目に見えて異なる。景品はモチベーションであり励みになる。そういった仕組みも上手く活用していきたい。 委 員) スポーツ活動の後に、お茶をする時間や場所が確保できるととてもよい。スポーツの後は話が弾み、仲間づくりにもつながる。 委 員) ウォーキングは運動中に会話ができるという利点があり、コミュニケーションツールとしても有効だと考えられている。 委 員) スポーツは、住民が「このまちに住みたい」という要員としての役割も期待できる。 委 員) 「走る」ことは全ての運動の基本なので、地域の陸上クラブに、陸上以外の種目を行っている生徒が参加できるような環境を作ってあげたい。「水泳」も色々な競技に活かせると思う。
--	---

	委員) SCスマイルTOKAIの陸上アスリートクラスに参加していた子が、高校進学で県外の強豪校に進んだという話も聞く。 委員) クラブの運営はコストがかかる。行政がどれだけ負担できるかという課題はある。 委員) トップアスリートを養成するクラブとは一線を画して、地域に根差したクラブは地域で育てていくべきだと思う。「普通に（トップアスリートではなく）スポーツがしたい」と思った子を、いかに地域の力でやらせてあげられるかが重要。 委員) 「遊び」と「スポーツ」のバランスは難しい。「プレイ」に合わせすぎると「スポーツ」に取り組んでいる人は物足りないと感じる。村の施策は両立を目指すのがよいのだろうが、バランスは重要。 委員) 部活動は学校教育の一部だと考えており、民間クラブへの流出を危惧していたが、部活動もクラブ化という流れになってしまったのは残念。 委員) 村の総合計画にはどのようにスポーツが位置づけられているのか。 事務局) 誰もが気軽に楽しみながらスポーツに親しむことができる環境の整備や、人と人との交流による地域の一体感の醸成、賑わいと活力に満ちたまちづくりを目標として掲げている。 委員) 「“スポーツのまち”で子育てしてみても」と子育て世代へアプローチできるような計画にしたい。 委員) 地域力は重要で、有料講師を依頼するよりも近所の人に教えてもらえる仕組みや関係性が大切だと思う。
10 今後の予定	次回の委員会は令和5年5月に開催予定。